

『壬寅隨筆』 86所収

6月26日～7月16日 今町より新発田行、丹羽思亭を出迎う

7月17日～28日 下田郷・大白川紀行

「小泉蒼軒 天保13年(1842年)、蒼軒46歳 7月19日の稿より抜粋」

「(前略) あくる十九日、田上を立て西大崎にて五十嵐川をわたり曲渕に着、
(中略) 未の剋過る頃立出つ、細道伝へに大面駅より賀茂町に出る往還の道に出、月岡村を
右にし、諏方新田を左りミて、又細道を行々て五十嵐川の南へを山もとに至る、
是れよりよちのぼる山道は道心坂と唱ひ、此あたりの道心者(注1)のひらきたる近道なり
といへり、
峠の上へのほりつめてより、下田の郷内二三里かほと一目してけしきよし、
峠を打越平地に近きあたりに右の方山へのほる道あり、月岡方へ出る古道なりといへり、又
其側にかの道心者の墓あり、近道をひらきておほくの人の便より事になりしをよろこひ、此
塚(注2)をたて、後世にその名を伝へしよしに聞ゆ、
戒名の傍に享保の年をしるせるは其人の死せるとし歟(注3)
此塚をたてしとしか委しくハしれず、(後略)」

(注1)「道心者」とは広辞苑によれば「仏法に帰依した人」、「沙弥(しゃみ)」とは「出家して未だ正式の僧になっていない男子」とある。したがって、「白翁常閑」という名の僧(道心者)が、この峠を近道として開削し、多くの人から喜ばれた、とあることから、その僧を表す名が今の地名となって伝えられたものではないかと考えられる。

(注2) 同書の欄外に、この塚に刻されていたと思われる「白翁常閑沙弥 享保九辰年(注1724年)」の記載がある。

(注3) 歟(ヨ) = 句末に用いて疑問、推量、感嘆の意を表す助詞。→「か?」)